博多の元気を太鼓舞する音。

博多で太鼓の音といえば、博多祇園山笠の追い山スタートの合図がすぐ浮かぶ。大相撲九州場所の触れ太鼓も軽やかだ。日本人にとって太鼓は、さまざまな場面で欠かせない道具である。ただ、制作技術を伝える人は多くない。博多にいるその一人を訪ねた。

博多モノ語り【シリーズ28】

このシリーズは、風土が生んで、歴史が育てた博多のカタチ・地域の誇りを紹介するものです。物言わぬモノたちの声を聞いてください。

梅津太鼓店の8代目 梅津義博さん

うめつ・よしひろ ㈱梅津正平商店代表取締役。1971年、熊本市生まれ。福岡大学商学部卒。大学で梅津家長女と知り合い、入り婿に。先代幸弘さん(78)と職人髙木淳吉さん(83)の指導で太鼓職人としての修業を積む。200年近い歴史を持つ梅津太鼓店の8代目に当たる。

太鼓

梅津太鼓店の仕事

博多で最も音が知られた太鼓。博多祇園山笠で追い山のスタートに使われる（櫛田神社蔵）▼

店内に並ぶさまざまな種類の太鼓

山笠の追い山スタートに博多の太鼓は音高く響く

博多祇園山笠では、櫛田神社(福岡市博多区)前の土居通りに設けられた山止めから、「ドーン」という太鼓の音で舁(か)き山笠が飛び出して「櫛田入り」する。続いての太鼓の連打に舁き山笠が加速する。

このとき、境内入り口に組まれたやぐら上で神官がたたいているのが、梅津太鼓店が手掛けた太鼓である。直径約75㌢(2尺5寸)、赤い漆塗りの大きなものだ。1957(昭和32)年に納入された。2年前には太鼓、台ともに全ての塗り替えを含めた大掛かりな修復を行い、皮も張り替えた。威風堂々の、まさに風格ある太鼓である。

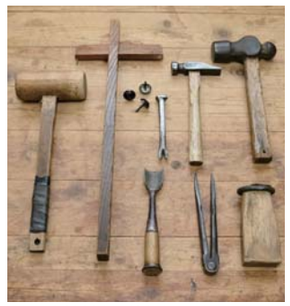
梅津太鼓店は、福岡市に1軒しかないという太鼓の製造販売専門店だ。創業は1823(文政6)年というから193年の歴史を持つ。現在の店主は8代目の梅津義博さん(44)である。この仕事を始めて22年たった。

太鼓は構造が単純なだけに、仕上げの微妙な調整で音が変わるという。「うちで作った太鼓かどうかは音を聞けば分かります」と義博さん。それは博多の太鼓の特徴を聞き分けられるということになる。

ではどう違うのか。「うちの太鼓は皮を強くしっかり張っているため、音が少し高く響きます。なじむのに数年かかりますが、いい状態を長く保ちます」と言う。長年の使用に耐えるにはいろいろと工夫が必要だ。そこに独自の技があった。

長い乾燥期間を終えて、出番を待つ胴

北陸のケヤキ、和牛の皮皮の厚みは手の感覚で



太鼓制作に使われる道具

「音の良しあしは胴と皮の質、またその皮の厚みと張り具合で決まります」と話す義博さん。梅津太鼓の胴の素材は北陸産のケヤキ。寒さに耐えて大きくなったものがいいという。他にセンも使う。中身をくりぬいた状態で3～5年かけて乾燥させる。

打面直径75㌢クラスの太鼓だと、胴の厚みは切り口近くで約1㌢、皮を留める鋲(びょう)を打つ部分が5㌢、胴の真ん中で6㌢。この厚みが同じ円周上でそろっていないと音は狂う。

胴の形が他店で作られたものと比べて丸みを帯びているのも特徴である。それだけ大きな木から削り出すことになる。空間が広く、音が響く。周りはかんなで仕上げるが、逆目にならないように細心の注意が必要だ。作業には大きい太鼓だと2日以上かかる。

皮は和牛に限る。それも薬品を使わずに、昔ながらの糠(ぬか)なめしという糠を発酵させた液で毛を抜き、不純物を流す手法で仕上げる。粘りと締まりがあって最上だという。太鼓の大きさに合わせて1頭分の皮から裁断し、手のひらで厚みを確認しながら専用のすきかんなで裏を削って調節する。この皮は8個のジャッキを使って限界まで引いて張られるが、均一に力を加えないと破れてしまう。これも勘の世界である。

鋲の打ち方では梅津太鼓の鋲は隙間なく打ってある。その数は260個にも上るという。皮をしっかりと固定する秘訣(ひけつ)だ。これらの技の集積が、音が確かで長持ちする太鼓を生み出しているのである。

皮を張り替え中の太宰府天満宮の巨大太鼓

国立文楽劇場へ納入皮の張り替えも増加

梅津太鼓店が手掛けた太鼓には、1928(昭和3)年の昭和天皇即位の大礼用に奉納される米を福岡で栽培した主基斎田(すきさいでん)の御用太鼓や、84年に国立文楽劇場へ納めた大太鼓も含まれている。博多の神社仏閣や学校、和太鼓のチームも多く使用する。

国立文楽劇場に納入した太鼓（写真提供／梅津太鼓店）

取材で工房を訪ねたときには、直径約90㌢(3尺)という超大型の太鼓が修理中だった。太宰府天満宮の所蔵品で、1740(元文5)年に大阪で作られたものだという。300年近い時を経てまだ現役。胴の内側に2代前の梅津隆三さん(故人)が皮を張り替えた記録があった。

近年、和太鼓の人気が高く、張り替えも多いという。数少なくなった専門店の責任を感じると義博さん。「太鼓の皮はきちんと使えば10～20年は大丈夫。胴の方は使い方によっては100年以上持ちます。ただ、カシなどの堅いばちで縁をたたくと縁が欠けるので避けてください」とアドバイスする。

気になるのは太鼓の価格。打面直径75㌢のケヤキ胴長太鼓で486万円。直径45㌢でも78万8千円余というから高価なものだ。原木を切り出して製品に使えるまでの長い時間や、匠(たくみ)の技の値ということになる。

祭りや運動会で参加者のパワーを引き出す太鼓の響き。博多の元気を鼓舞するためにも、数少ない太鼓職人の裾野が広がることを願いたい。

■梅津太鼓店
福岡市博多区千代3-6-1
☎092(651)0322

●この企画へのご意見、ご感想があればお寄せください。
〈宛先〉〒810-8721 福岡市中央区天神1-4-1
西日本新聞社企画推進部「博多モノ語り」係

企画・制作／西日本新聞社広告局